

政談十二社

泉鏡花

青空文庫

東京もはやここは多摩の里、郡の部に属する内藤新宿の町まちはず端れに、近頃新開で土の色赤く、日当ひあたりのいい冠木門かぶきもんから、目のふちほんのりと酔えいを帯びて、杖を小脇に、つかつかと出た一名の瀟洒しょうしゃたる人物がある。

黒の洋服で雪のような胸、手首、勿論靴で、どういう好みか目ま庇びさしのつツと出た、鉄道の局員が被かぶるような形かたなのを、前さがりに頂いた。これにてらてらと小春の日の光を遮かつて、やや蔭かげになった頬骨ほおぼねのちつと出た、目の大きい、鼻たかの隆たかい、背せのすつくり

した、人品に威厳のある年齢ねんばい三十ばかりなるが、引ひ緊きつた口くちに葉巻を啣くわえたままで、今門を出て、刈取つたあとの蕎麦そば畠はたけに面ました。

この畠を前にして、門前の径こみちを右へ行ゆけば通とおり出でて、停車場ステーションへは五町に足りない。左は、田舎道で、まず近いのが十二社じゅうにそ、堀ノ内、角つのはず筈はず、目黒などへ行ゆくのである。

見れば青物を市へ積出した荷車が絶えては続き、街道を在所の方へ曳ひいて帰る。午後三時を過ぎて秋の日は暮れるに間もあるまいに、停車場ステーションの道には向わないで、かえつて十二社の方へ靴さきめくの尖さきを廻めぐらして、衝つと杖ステッキを突出した。

しかもこの人は牛込南町辺に住居すまいする法官である。去年まず検

事補に叙せられたのが、今年になって夏のはじめ、新あらたに大審院の判事に任せられると直ぐに暑中休暇になったが、暑さが厳しい年であつたため、瘦やせるまでの煩いをしたために、院が開けてからも二月ばかり病氣びきをして、静しずかに療養をしたので、このごろではすっかり全快、そこで届を出してやがて出勤をしようという。

ちようど日曜で、久しぶりの郊外散策、足固めかたがた新宿から歩ある行いて、十二社あたりまで行こうという途中、この新開に住んでいる給水工場の重役人に知合があつて立寄つたのであつた。

これから、名を由よしのすけ之助という小山判事は、埃ほこりも立たない秋の空は水のように澄渡つて、あちらこちら蕎麦の茎の西日の色、真ま赤つかな蕃とうがらし椒が一団々々ある中へ、口にしたその葉巻の紫の煙を

軽く吹き乱しながら、田圃道たんぼみちを楽しそう。

その胸の中うちもまた察すべきものである。小山はもとより医者が厭いやだから文学を、文学も妙でない、法律を、政治をといった側の少年ではなかった。

されば法官がその望のぞみで、就なかんずい中希ねがつた判事に志を得て、新たに、はじめて、その方は……と神聖にして犯すべからざる天下控訴院の椅子にかかろうとする二三日。

足の運びにつれて目に映じて心に往来ゆききするものは、土橋でなく、流ながれでなく、遠方の森でなく、工場の煙突でなく、路みち傍ばたの藪やぶでなく、寺の屋根でもなく、影でなく、日南ひなたでなく、土の凸凹でこぼこでもなく、かえって法廷を進退する公事くじ訴訟人の風采ふうさい、倅おもかげ、伏目ふしめに

我を仰ぎ見る囚人の顔、弁護士の額、原告の鼻、検事の髯、押
 丁等の服装、傍聴席の光線の工合などが、目を遮り、胸を蔽う
 て、年少判事はこの大なる責任のために、手も自由ならず、足の
 運びも重いばかり、光った靴の爪尖と、杖の端の輝く銀とを心
 すともなく直視めながら、一步進み二歩行く内、にわかには颯と暗
 くなつて、風が身に染むので心着けば、樹蔭なる崖の腹から二頭
 の竜の、二条の氷柱を吐く末が百筋に乱れて、どツと池へ灌ぐ
 のは、熊野の野社の千歳経る杉の林を頂いた、十二社の滝の下
 路である。

「何か変つたこともないか。」と滝に臨んだ中二階の小座敷、欄干に凭もたれながら判事は徒つれづれ然に茶店の婆さんに話しかける。

十二社あたりへ客の寄るのは、夏も極暑の節ひとさかり一盛で、やが

て初冬にもなれば、上の社やしろの森の中で狐が鳴こうという場所柄の、

さびれさ加減思うべしで、建廻した茶屋休息所やすみどころ、その節は、ビ

ール聞し召せ枝豆も候だのが、ただ葦簣よしずの屋根と柱のみ、破やぶれの見

える床の上へ、二ひら三ひら、申訳だけの緋ひの毛布けつとを敷いてある。

その掛茶屋は、松と薄すすぎで取廻し、大根畠を小高く見せた周囲五町

ばかりの大池みぎわの汀みぎわになつていて、緋鯉ひいの影、真鯉の姿も小波さざなみの

立つ中に美しく、こぼれ松葉の一筋二筋すべ迂るすべるように水面を吹かれ

て渡るのも風情であるから、判事は最初、杖をここに留めて憩つたのであるが、眩いばかり西日が射すので、頭痛持なれば眉を顰め、水底へ深く入った鯉とともにその毛布の席を去つて、間に土間一ツ隔てたそれなる母屋の中二階に引越したのであつた。

中二階といつてもただ段の数二ツ、一段低い処にお幾という婆さんが、塩煎餅の壺と、駄菓子せんべいの箱と熟柿つぼの筧を横に控え、角火鉢おおきの大きいのに、真鍮しんちゆうの薬罐やかんから湯気を立たせたのを前に置き、煤けた棚の上に古ぼけた麦酒ビールの瓶、心太ところてんの皿などを乱雑うしろに並べたのを背後うしろに背負い、柱に安煙草やすたばこのびらを張り、天井すてうちわに捨団扇をさして、ここまでさし入る日あたりに、眼鏡を掛けて継物なんにをしている。外に姉さんも何も居ない、盛さかりの頃は本家から、

女中料理人を引率して新宿停車場ステーション前の池田屋という飲食店が夫婦づれ乗込むので、独身ひとりみの便たよりないお幾婆さんは、その縁続きのものとか、留守番を兼ねて後生のほどを行い澄すますという趣。

判事に浮世ばなしを促されたのを機しおにお幾はふと針の手を留めたが、返事より前さきに逸いちはや疾はやくその眼鏡を外した、進んで何か言いたいことでもあつたと見える、別の吸子きゆうすに沸たぎつた湯をさして、盆に乗せるとそれを持つて、前垂まえだれの糸屑いとくずを払いさま、静しずかに壇を上あつて、客の前ひざまずに跪ひざまずいて、

「お茶を入替かえて参まりました、召上まりまし。」といいなながら膝ひざ近くにじ躡にじり寄よつて差置さいた。

判事は欄干について頬を支さえていた手を膝ひざに取とつて、

「おお、それは難^{ありがと}有^う。」

と婆^{はば}の目には、もの珍しく見ゆるまで、かかる紳士の優しい容^よ子^{うす}を心ありげに瞻^{みまも}つたが、

「時に旦那様。」

「むむ、」

「まあ可哀そうだと思^{おぼしめ}召^めしまし、この間お休み遊ばしました時、ちよつと参りましたあの女でございませうが、御串^{ごじょうだん}戯^ごではございませうが、旦那様も佳^い女^めだな、とおっしゃつて下さいましたあのことでございませうがね、」

と言いかけてちよつと猶^{ためら}予^らつて、聞く人の顔の色を窺^{うかが}つたのは、
こういつて客がこのことについて注意をするや否やを見ようとし

たので。心にもかけないほどの者ならば話し出して退屈をさせるにも及ばぬことと、年寄だけに気が届いたので、案のごとく判事は聴く耳を立てたのである。

「おお、どうかしたか、本当に容子の佳い女だよ。」

「はい、容子の可い女で。旦那様は都でいらつしやいます、別にお目にも留りますまいが、私どもの目からはまるでもう弁天様か小町かと見えますほです。それに深切で優しいおとなしい女でございまして、あれで一枚着飾らせませすれば、上つ方のお姫様と申しても宜い位。」

「ほほほ、賞ほめまするに税は立たず、これは柳橋も新橋も御存じでいらつしやいましょう、旦那様のお前で出まかせなことを失礼な。」

小山判事は苦笑をして、

「串じょうだん戯ごをいっては不可いかん、私は学生だよ。」

「あら、あんなことをおつしやつて、貴方あなたは何ぞの先生様でいらつしやいますよ。」

「まあその娘がどうしたというのだ。」と小山は胡坐あぐらをどっかりと組直した。

落着いて聞いてくれそうな様子を見て取り、婆さんは嬉しそう

に、

「何にいたせ、ちつとでもお心に留つておりますなら可哀そうだと思つてやつて下さいまし。こうやつてお傍そばでお話をいたしますのは今日がはじめて。私わたくしどもへお休み下さいましたのはたつた二度なんでございますけれども、他に誰ほかも居おりませず、ちようどあの娘こが来合せました時でよくお顔を存じておりますし、それにこゝう申してはいかがでございませうが、旦那様もあの娘こを覚えていらつしやいますように存じます。これも佳いい娘こだと思ひまする年寄よくめの慾目よくめ、人ひとごとながら自惚うぬぼれでございませう、それで附かぬことをお話し申しますようではございませうけれども旦那様、後生でございませう、可哀相だと思つてやつて下さりませう。」と繰返して

また言った。かく可哀相だと思つてやれと、色に憂うれいを帯びて同情を求めること三たびであるから、判事は思わず胸が騒かむむいで幽むらに肉の動くのを覚えた。

むこうじま

がれ

向島

のうら枯がれさえ見に行く人もないのに、秋の末の十二社、

それはよし、もの好ずきとして差措さしおいても、小山にはまだ令室のない

こと、並びに今も来る途中、朋友なる給水工場の重役の宅で一いっさ

盞んすすめられて杯の遣取やりとりをする内に、娶めとるべき女房の身分に

就いて、忠告と意見とが折合ず、血氣の論とたしなめられながら

も、耳みみたぶ朶たぶを赤うするまでに、たといいかなるものでも、社会の

階級の何種に属する女でも乃だい公こうが氣に入ったものという主張

をして、華族でも、士族でも、町家の娘でも、令嬢でもたとい小

間使でもと言つたことをここに断つておかねばならぬ。

何かしら絆きずなが搦からんでゐるらしい、判事は、いづれ不祥のことと胸を——色も變つたよう、

「どうかしたのかい、」と少しせき込んだが、いう言葉に力が入つた。

「煩つておりますので、」

「何、煩つて、」

「はい、煩つておりますのでございますが。……」

「良い医者につけなけりや不可いかんよ。どんな病氣だ、ここいらは田舎だから、」とつい通とおりの人のただ口さきを合せる一応の挨拶のごときものではない。

婆さんも張合のあることと思入った形で、

「折入つて旦那様に聞いてやつて頂きたいので、委くわしく申上げませんと解りません、お可うるさ煩くなりましたら、面倒だとおっしゃつて下さりまし、直ぐとお茶にいたしてしまいます。

あの娘は阿米およねといひましてちようど十八になりますが、親なしで、昨きよねん年の春まで麴こうじまち町十五丁目辺で、旦那様、榎えのきのお医者といつて評判の漢方の先生、それが伯父御に当ります、その邸やしきで世話になつて育ちましたそうでございます。

門の屋根を突貫いた榎の大木が、大層名高いのでございますが、お医者はどういたしてかちつとも流行らないのでございましてツて。」

四

「流行りません癖に因果と貴方あなたね、」と口もややなれなれ馴なれなれ々しゆう、
「お米の容きりよう色がまた評判でございまして、別べつ嬪びんのお医者、榎
の先生と、番町辺、津の守坂かみざか下あたりまでも皆みんなが言いい囃はやしまし
たけれども、一向にかかります病人がございませぬ。

先生には奥様と男のお児こが二人、姪めいのお米、外見を張るだけに
女中も居ようというのですもの、お苦しかろうではございませぬ
か。

そこで、茨城の方の田舎とやらに病院を建てた人が、もつとも

らしい御容子ごようすを取柄に副院长にという話がありましたそうで、早速家うちじゆう中それへ引越すことになりますと、お米さんでございませす。

世帯を片づけついでに、古い筆筒たんすのひとさお一棹も工面をするからどちらへか片附いたらと、体ていの可いまあ厄介やくわい払に、その話がありましたが、あの娘こも全く縁附く気はございませず、親身しんしんといつては他ほかになし、山の奥へでも一所にといいたい処を、それは遣やりくり繰の様子も知っておりまことなり、まだ嫁入はいたしたくございません、我わがまま儘を申しますようで恐入りますけれども、奉公がしとうございませすと、まあこういうので。

伯父御の方はどのみち足手まといさえなくなれば可いいのでござ

いますよ、売れば五両にもなる筆筒だってお米につけないですむことですから、二ツ返事で呑込みました。

あの容きりよう色うちで家の仇名あだなにさえなつた娘こを、親身を突放したと思えば薄情でございませうが、切ない中を当節柄、かえつてお堅い潔白なことではございませうかね、旦那様。

漢方の先生だけに仕込んだ行儀もございませう。ちようど可い口があつて住込みましたのが、唯ただいま今居おりまする、ついこの先のお邸で、お米は小間使をして、それから手が利きますので、お針もしておりますのでございませうよ。」

「誰の邸だね。」

「はい、沢井さんといって旦那様は台湾のお役人だそうで、始終

あつちへお詰め遊ばす、お留守は奥様、お老としより人はございませんが、余程の御大身だと申すことで、奉公人も他ほかに大勢、男衆も居おります。お嬢様がお一方、お米さんが附きましてはちよいちよいこの池の緋鯉や目高に麩ふを遣りにいらつしやいますが、ここらの者はみんな姫ひいさま様々々と申しますよ。

奥様のお顔も存じております、私わたくしがついお米と馴染なじみになりましたので、お邸の前を通りますれば折節お台所口へ寄りましては顔を見て帰りますが、お米の方でも私わたくしどものようなものを、どう間違えたかお婆さんお婆さんと、一体人ひと懐なつこいのにまた格別に慕つてくれますので、どうやら他人とは思えません。」

婆さんはこの時、滝たきのぼり登のぼりの懸物、柱かけの生花、月並の発句

を書きつけた額などを静しずかにまわしたから、判事も釣込まれてなぜと
はなくあたりを眺めた。

向直つて顔を見合せ、

「この家は旦那様、停車場前に旅籠屋をいたしております、甥おい
のものでも私はまあその厄介でございませす。夏この滝の繁はんじよう昌しょう

な時分はかえつて貴方、邪魔もので本宅の方へ参つております、

秋からはこうやつて棄てられたも同然、私も姨捨山わたくしおばすてやまに居ります

気で巢守すもりをしますのでございましてね、いいえ、愚痴ぐちなことを申上

げますのではございませんが、お米もそこを不便ふびんだと思つてくれ

ますか、間を見てはちよこちよこと駆けて来て、袂たもとからだの、小

風呂敷すきからだの、好きなものを出して養つてくれます深切せきせき、」と

しめやかに語って、老おいの目は早や涙。

五

密そつと、筒袖つつそでになつてゐる襦袢じゆばんの端で目を拭ぬぐい、

「それでございますから一日でも顔を見ませんと寂しくつてなりません、そういうことになつてみますると、役者だつて鼻ひいき真まには可い役がさしてみとうございましょう、立派な服装みなりがさせてみとうございましょう。ああ、叶かのう屋やの二階で田之助を呼んだ時、その男衆にやつた一包の祝儀があつたら、あのいじらしい娘に褌つまの揃そろつたのが着せられましようものなぞと、愚痴も出ます。唯今

の姿を罰ばちだと思つて罪滅ざんげしに懺悔ざんげばなしもいいます。わたくし私もこう申してはお恥かしゆうございませが、昔からこうばかりでもございませぬ、それもこれも皆みんななり行ゆきだと断念あきらめましても、断念められませぬのはお米の身の上。

二三日顔を見せませんから案じられます、逢いとうはございませぬ、辛抱がし切れませんでちよつと沢井様のお勝手へ伺いますと、何あなた貴方、お米は無事で、奥様も珍しいほど御機嫌のいい処、竹屋の婆さんが来たが、米や、こちらへお通し、とおっしゃると、あの娘こもいそいそ、連れられて上りました。このごろ客が立て込んだが、今日は誰も来ず、天気は可よし、早咲の菊を見ながらちようどお八ツ時分と、お茶お菓子を下さいますして、私わたくし風情へいろいろ

と浮世話。

お米も嬉しそうに傍そばについてくれますなり、私はまるで貴方、嫁にやった先の姑しゅうとに里の親が優しくされますような気で、ほくほくものでおりました。

何、米にかねがね聞いている、婆さんお前は心こころ懸がけの良いいものだというから、滅多に人にも話されない事だけれども、見せて上げよう。黄金きんが肌に着いていると、霧が身のまわり六尺だけは除よけるとまでいうのだよ、とおっしゃってね。

貴方五百円。

台湾の旦那から送って来て、ちようどその朝銀行で請取っておいでなすったという、ズツシリと重いのが百円ずつで都合五枚。

お手箆筒の抽斗ひきだしから厚紙に包んだのをお出しなすつて、私に頂かして下さいました。

両手に据えて拝見をいたしました、何と申上げようもございませぬ。ただへいへいと申上げますと、どうだね、近頃出来たばかり、年号も今年のだよ、そういうのは昔だつて見た事はあるまい、また見ようたつて見せられないのだから、ゆっくり御覧、正直な年寄だというから内証で拝ませるのだよ。米や茶をさしておやり、と莞爾にこついでおいで遊ばす。へへ、」と婆さんは薄うすわらい笑をした。

判事は眉を顰ひそめたのである、片腹痛さもかくのごときは沢山あるまい。

婆さんは額の皺しわを手で擦さすり、

「はや実まことにお情深い、もつとも赤十字とやらのお顔かお利きと申すこと、丸顔で、小造こづくりに、肥ふとつておいで遊ばす、血の氣の多い方、髪をいつも西洋風にお結びなすつて、貴方、その時なんぞは銀行からお帰りそうそく々々そうそくと見えまして、白襟で小紋のお召を二枚も襲かさねていらつしやいまして、早口で弁舌さわやかの爽さわやかな、ちよこまかにあれこれあれこれ、始終こきざみ小刻こきざみに体を動かし通し、氣はたらきの働はたらきのあらつしやるのは格別でございます、旦那様。」と上目づかい。

判事は黙つてうなずいた。

婆さんは唾つをのんで、

「お米はいつもお情なさけない方だとばかり申しますが、それは貴方、

女中達の箸はしの上げおろしにも、いやああだのこうだのおつしやるのも、欲ほしいだけ食べて胃袋を悪くしないようにという御深切でございましょうけれども、私わたくしは胃袋へ入ることよりは、腑ふに落ちぬことがあるでございますよ。」

六

「昨きよねん年のことで、妙にまたいとこはとこが搦からみますが、これから新宿の汽車や大久保、板橋を越しまして、赤羽へ参ります、赤羽の停車場ステーションから四人詰づめばかりの小さい馬車が往復します。岩い淵わぶちの渡場わたしば手前に、姉せがれの悴がれが、女房持で水呑百姓をいたしてお

りまして、しがなみのうえい身上ではありまするけれど、氣立の可い深
 切ものでございますから、私も当あてにはしないで心頼りと思つてお
 ります。それへ久しぶりで不沙汰見舞ぶさたに参りますと、狭い処へ一
 晩泊めてくれましたして、翌日あくるひおひる過ぎ歸りがけに、貴方、納屋
 のわきにございます、柿を取つて、土産を持つて行きました風呂
 敷にそれを包んで、おばさん、詰らねえものを重くツても、持つ
 て行ツとくんなせえ。そのかわり私が志で、ここへわざと端はしたぜ
 錢にをこう勘定して置きます、これでどうぞ腰の痛くねえ汽車の
 中等へ乗つて、と割つて出しましただけに心持が嬉しゅうござい
 ましよう。勿体ないがそれでは乗ろうよ。ああ、おばさん御機嫌
 ようと、女房も深切な。

二人とも野良へ出がけ、それではお見送みおくりはしませんからと、
跣足はだしのまま並んで門かどへ立って見ております。岩淵から引返して停ス
テエション
車場へ来ますと、やがて新宿行のを売出します、それからこの
服装みなりで気恥かしくもなく、切符を買ったのでございしますが、一等
二等は売出す口も違いますね、旦那様。

人ごみの処をおしもおされもせず、これも夫婦の深切と、嬉し
いにつけて気が勇みますので、臆おくめん面もなく別の待合へ入りまし
たが、誰も居おりません、あすこはまた一倍立派でございしますね、
西洋の緞子どんすみたような綾あやで張詰めました、腰をかけますとふわり
と沈つまさきんで、爪尖つまさきがポンとこう、「

婆はたさんは手を揃えて横の方で軽くはた払き、

「刎はね上ありますようなのに控え込んで、どうまた度胸が据すりまし
たものか澄しております処へ、ばらばらと貴方、四五人入ってお
いでなすつたのが、その沢井様の奥様の御同勢でございまして。
いきなり卓テ子エの上へショオルだの、信玄袋だのがどさどさと
並びますと、連つれの若い男の方が鉄砲をどしりとお乗せなすつた。
銃つづぐち口わたくしが私の胸の処へ向きましたものでございしますから、飛上つ
て旦那様、目もくらみながらお辞儀をいたしますると、奥様のお
声で、

おやお婆さん、ここは上等の待合室なんだよ、とどうでしょう
……こうでございます。

人の胃袋の加減や腹工合はどうであろうと、私が腑ふに落ちない

と申しますのはここなんでございますが、その時はただもう冷汗びツしより、穴へでも入りたい気になりました、しおしお片隅の氷のような腰掛へ下りました。

おくれぼ後馳せにつかつかと小走こぼしりに入りましたのが、やつぱりお供の中うちだったと見えまする、あのお米で。

卓子を取巻きまして御一家ごいっけがずらりと、お米が姫様ひいさまと向う正面にあいている自分の坐る処へ坐らないで、おや、あなたあいておりますよ、もし、こちらへお懸けなさいましな、冷えますから、と旦那様。」

婆さんはまた涙なみだぐ含んで、

たもと「袂たもとから出した手巾ハンケチを、何とそのままあ結構な椅子つかまに摺りながら、

人込の塵埃ほこりもあろうと払はたいてくれましたらうではございませんか、私が、あの娘こに知ちかづ己きになりましたのはその時でございました。」
 待て、判事がお米を見たのもまたそれがはじめてであつた。

七

婆おばさんは過いつかおの日ひ己おのが茶店ちやてんにこの紳士しんしの休やすんだ折をり、不意ふいにお米おこめが来き合せたことばかりを知しっているが——知らずやその時とき、同一おなじ赤羽あかの停ステ車エシ場ヨンに、沢井さわいの一行いっぺんが卓テ子エブルを輪りんに困こんだのを、遠とほく離はなれ、帽子ぼうしを目まぶか深かに、外がい套とうの襟えりを立てて、件くだんの紫むらの煙けむりを吹ふきながら、目めばかり出したその清きよい目で、一いち場じようの光景きやうけいを屹きつと瞻みまもっていた

ことを。——されば婆さんは今その事について何にも言わなかつたが、実はこの媪おうな、お米に椅子を払って招じられると、帯の間あいからぬいと青切符をわざとらしく抜出して手に持ちながら、勿体ない私風情わたくしがと、いいいい貴夫人の一行をじろりとみまわし、躡り寄にじつて、お米が背後うしろに立った前の処、すなわち旧もとの椅子に直つて、そして手を合せて小間使を拝んだので、一行が白け渡つたのまで見て知つている位であるから、この間のこの茶店における会合は、娘と婆さんとは不意に顔の合つただけであるけれども、判事に取つては蓋けだし不思議のめぐりあいであつた。

かく停車場ステーションにお幾が演じた喜劇を知っている判事には、婆さんの昔の栄華も、俳優やくしやを茶屋の二階へ呼びなどしたことのある

様子も、この寂^{せき}寞^{ぼく}の境に堪え得て一人で秋冬を送るのも、全体を通じて思い合さるる事ばかりであるが、可^よし、それもこれも判事がお米に対する心の秘密とともに胸に秘めて何事も謂^いわず、ただ憂^{きづ}慮^かわしいのは女の身の上、聞きたいのは婆^{ばば}が金貨を頂かせられて、——

「それから、お前がその金子^{かね}を見せてもらうと、」
促して尋ねると、意外千万、

「そのお金が五百円、その晩お手^て箆^{だん}筒^すの抽^ひ斗^きから出してお使いなさろうとするとすっかり紛失をしていたのでございます、」と句切つて、判事の顔を見て婆^ばさんは溜^た息^めを吐^ついたが、小山も驚いたのである。

赤羽停車場ステーションの婆さんの挙動と金貨を頂かせた奥方の所為しわざとは

不言不語いわずかたらずの内に線を引いてそれがお米の身に結ばれるとうような事でもあるだろうと、聞きながら推したに、五百円が失うせたというのには思いがけない極きわみであつた。

「ええ、すっかり紛失？」と判事も屹きつと目を瞠みはつたが、この人々はその意気において、五すうという数が、百となつて、円とあるのに慌てるような風ではない。

「まあどうしたといふのでございますか、抽斗にお了しまいなすつたのは私もその時見ておりましたのに、こりや聞いてさえ吃驚びっくりいたしますものお邸では大騒ぎ。女などは髪切かみきれの化物が飛び込んだように上を下、くるくる舞うやらぶつかるやら、お米なども蒼

くなつて飛んで参つて、私にその話をして行きましたっけ。

さあ二日経^たつても三日経つても解りますまい、貴夫人とも謂われるものが、内からも外からも自分の家のことに就いて罪人は出したくないとおっしゃつて、表沙汰にはなりません、とにかく、不取締でございますから、旦那に申訳がないとのことで大層御心配、お見舞に伺いまする出入のものに、纒^{わづか}ばかりだけれども纒ばかりだけれども念をお入れなすつちやあ、その御吹聴^{ごふいちよう}で。

そういたしますとね、日頃お出入の大八百屋の亭主で佐助と申しまして、平生は奉公人大勢に荷を担がせて廻らせて、自分は帳場に坐つていて四ツ谷切つて手広く行^やつておりますのが、わざわざお邸へ出て参りまして、奥様に勧めました。さあこれが旦那

様、目黒、堀ノ内、渋谷、大久保、この目黒辺あたりをかけて徘徊はいかいを
いたします、真夜中には誰とも知らず空のものと談話はなしをしますと
いう、鼻の大きな、爺じいの化精ばけものでございまして。」

八

「旦那様、この辺をお通り遊ばしたことがございますなら、田舎
道などでお見懸けなさりはしませんか。もし、御覧ごらうじましたら、
ただ鼻とこう申せば、お分りになりますでございましょう。」

判事はちよつと口を挟んで、

「鼻、何鼻の大きい老人、」

「御覧じやりましたかね。」

「むむ、過日いっか来る時奇代な人間が居ると思つたが、それか。」

「それでございますとも。」

「お待ち、ちようどあすこだ、」と判事は胸を斜めに振返つて、

欄干てすりに肱ひじを懸けると、滝の下道が三ツばかり畝うねつて葉の蔭に入る

ひとむら
一叢やぶの藪ゆびさを指した。

「あの藪を出て、少し行つた路傍みちばたの日当ひあたりの可よい処に植木屋の

木戸とも思うのがある。」

「はい、植吉でございます。」

「そうか、その木戸の前に、どこか四ツ谷辺の縁日へでも持出す

と見えて、女郎花おみなえしだの、桔梗ききよう、竜胆りんどうだの、何、大したもの

はない、ほんの草物ばかり、それはそれは綺麗に咲いたのを積んだまま置いてあつた。

私はこう下を向いて来かかったが、目の前をちよろちよろと小蛇が一条、彼岸過すぎだつたに、ぽかぽか暖かつたせいか、植木屋の生垣の下から道を横に切つて畠の草の中へ入つた。大嫌だいきらいだから身震みふるをして立留つたが、また歩ある行き出そうとして見ると、蛇よりもつとお前心持の悪いものが居たろうではないか。

それが爺じいよ。

綿を厚く入れた薄汚れた棒ぼう縞じまの広袖どてらを着て、日に向けて背せなかを円まるくしていたが、なりの低い事。草色の股引ももひきを穿はいて藁草履わらぞうりで立っている、顔が荷車の上あたり、顔といえは顔だが、成程鼻

といえば鼻が。」

「でございましょうね、旦那様。」

「高いんじやあないな、あれは希代だ。一体馬面うまづらで顔も胴位おとがいあろう、白い髻ひげが針を刻んでなすりつけたように生えている、頤おとがいと
 いったら臍へその下に届いて、その腮あごの処ところまで垂下おつかぶつて、口へ押冠おつかぶ
 さつた鼻の尖さきはぜんまいのように巻いているじやあないか。薄うすあ
 紅かく色がついてその癖筋かが通つちやあないな。目はしよぼし
 よぼして眉が薄い、腰が曲つて大儀かそうに、船頭かが持つ權かのよう
 な握にぎりぶと太な、短い杖をな、唇へあてて手をその上へ重ねて、あ
 れじやあ持もちおも重おもりがするだろう、鼻を乗せて、気だるそうな、退
 屈いらしい、呼吸いきづかいも切なそうやみあがで、病後やみあがり見たような、およ

そ何だ、身体中の精分が不のこ残集らつて熟したような鼻ツつきだ。

そして背を屈かがめて立つた処は、鴻こうの鳥が寝ているとしか思われぬ

。

「ええ、もう傘からかさのお化がとんぼを切った形なんでございますよ。」

「芬ぶんとえた村へ入ったような臭におがする、その爺じい、余り日南ひなたぼっこ

を仕過ぎて逆上のぼせたと思われる、大きな真しん鍬ちゆうの耳搔みみかきを持つ

て、片手で鼻に杖をついたなり、馬面を据えておいて、耳の穴を

搔かきはじめた。」

「あれは癖でございまして、どんな時でも耳搔を放しましたこと

はないのでございます。」

「余り希代だから、はてな、これは植木屋の荷じゃあなくツて、

どこへか小屋がけをする飾かざりにつかう鉢物はちうえで、この爺おやは見世物の種たねかしらん、といやな香においを手でおさえて見ていると、爺おやがな、クツクツクツといい出した。

恐おそしい鼻呼吸はないき吸すじやあないか、荷車かまに積たんだ植木鉢うゑばちの中に突つ込こむようにして桔梗ききやうを嗅かぐのよ。

風流気ふうりゅうきはないが秋草あきくさが可哀あはれそうで見みていられない。私わたしは見返みかえりもしないで、さつさとこつちへ通と抜ぬけて来きたんだが、何なにだあれは。
。「といいながらも判事はんじは眉根まゆねを寄せたのである。

「お聞きなさいまし旦那様だんなさま、その爺おやのためにお米こめが飛とんだことになりました。」

九

「まずあれは易者なんで、佐助めが奥様に勧めましたのでござい
ます、鼻はトをうらないいたします。」

「トを。」

「はい、トをいたしますが、旦那様、あの筮ぜい竹ちくを読んで算木を
並べます、ああいうのはございませぬ。二三度何とかいう新聞
にも大騒ぎを遣つて書きました。耶蘇ヤソの方でむずかしい、予言者
とか何とか申しますとのこと、やっぱり活如いきによらい如来様が千年のあと
までお見通しで、あれはああ、これはこうと御存じでいらつしや
るといったようなものでございませぬとさ。」

真顔で言うのを聞きながら、判事は二ツばかり握拳を横にして火鉢の縁を軽く圧えて、確めるがごとく、

「あの鼻が、活如来？」

「いいえ、その新聞には予言者、どういふことか私には解りませんが、そう申して出しましたそうで。何しろ貴方、先の二十七年八年の日清戦争の時なんざ、はじめからしまいまで、昨日はどこそこの城が取れた、今日は可恐しい軍艦を沈めた、明日は雪の中で大戦がある、もつともこつちがたが勝じや喜びなさい、いや、あと二三ヶ月で鎮るが、やがて台湾が日本のものになるなどと、一々申す事がみんな中りまして、号外より前に整然と心得ているくらいは愚な事。ああ今頃は清軍の地雷火を犬が嗅ぎ

つけて前足で掘出してゐるわの、あれ、見さい、軍艦の帆柱へ鷹たかが留つた、めでたいと、何とその戦に支那へ行つておいでなさるお方々の、親子でも奥様でも夢にも解らぬことを手に取るように知つていたという吹ふいちよう聴ちやうではございませんか。

それも道理、その老人としよりは、年紀十八九の時分からひとしきり一時、

この世の中から行方が知れなくなつて、今までの間、甲州の山続きしらくも白雲とじこもという峰ひとあしに閉籠はなしつて、人足はなしの絶えた処で、行い澄して、影も形もないものと自由自在はなしに談が出来るようになった、実に希代な予言者だと、その山の形容などというものはまるで大おおぎ薩摩つまのように書きました。

その鼻があの爺じじいなんでしょう、ごさいましてね。

はい、いえ、さようでございます、旦那様も新聞で御存じでも、あの爺のこととは思召しますまいよ。ちつとも鼻の大きなことは書いてないのだそうでございますから。

もつとも鐘しやうぎ 廼様がお笑い遊ばしちやあ、鬼が恐こわがりはいたしますまい、私どもが申せば活如来、新聞屋さんがおつしやればその予言者、活如来様や予言者殿の、その鼻ツつきがああだとあつては、根ツから難ありがたみ有味ありがたみがございませんもの、売ものに咲いた花でございますよう。

その癖雲霧が立籠めて、昼も真ま暗くらだといいました、甲州街道のその峰と申しますのが、今でも爺さんが時々お籠こもりをするという庵いおりがございまして。そこは貴方、府中の鎮守様の裏手でござい

まして、手が届きそうな小さな丘なんでございますよ。もつとも何千年の昔から人足の絶えた処には違いございません、何蕨わらびでも生えてりや小児こどもが取りに入りましようけれども、御覧じやりまし、お茶の水の向うの崖だつて仙台様お堀割の昔から誰も足踏をした者はございませんや。日蔭はどこだつて朝から暗うございます、どうせあんな萌もやしの糸瓜へちまのような大きな鼻の生えます処でございませもの、うっかり入ろうものなら、蚯蚓みみずの天上するのに出ツくわして、目をまわしませんければなりますまいではございせんか。」と、何か激したことのあるらしく婆さんはまくしかけた。

一息つき言葉をつき、

「第一、その日清戦争のことを見透^{みすか}して、何か自分が山の祠^{ほこら}の扉を開けて、神様のお馬の轡^{くつわ}を取って、跣足^{はだし}で宙を駈^{かけだ}出して、旅順口にわたりやお手伝でもして来たように申しますが、ちつとも戦^{いくさ}のあつた最中に、そんなことが解つたのではございません。ようよう一昨年から去年あたりへかけて騒ぎ出したのでございますもの、疑^{うたぐ}つてみました日には、当^{あて}になりはいたしません。しかしまあ何でございますね、前触^{まえぶ}が皆勝^{みんな}つことばかりでそれが事^{まつたく}実なんですから結構で、私^{わたくし}などもその話を聞きました当座は、もうもう貴方。」

と黙つて聞いていた判事に強請るがごとく、

「お可煩うるぎくはいらつしやいませんか、」

「悉くわしく聞こうよ。」

判事は倦うめる色もあらず、お幾はいそいそして、

「ええどうぞ。条すじを申しませんと解りません。私わたくしどもは以前、た

だ戦争のことにつきました。あれが御祈ごきとう禱をしたり、お籠こもり、断食な

どをしたという事を聞きました時は、難有ありがたい人だと思ひまして、

あんな鼻附でも何となく尊いもののように存じましたけれども、

今度のお米のことで、すっかり敵対むこうになりました。憎らしくツて、

癩しやくに障つてならないのでございます。

あんなものということが当になんぞなりますものか。トうらないもくだ

らないもあつたもんじやあございません。

でございますが、難ありがたみ有味はなくツても信仰はしませんが、

厭いやな奴は厭な奴で、私がこう悪あつこう口を申しますのを、形は見えませんが、せんでもどこかで聞いていて、仇あだをしまいかと思ひますほど、気味の悪い爺じじいなんでございまして、」

といいながら日暮際のぱつと明あかるい、艶つやのないぼやけた下なる納戸に、自分が座の、人なき薄汚れた座蒲団のあたりを見て、婆うしろさんは後見らるる風情であつたが、声を低うし、

「全体あの爺は甲州街道で、小商人こあきんど、煮売屋ともつかず、茶屋ともつかず、駄菓子だの、柿だの饅頭まんじゅうだのを商ひまする内の隠居でございまして、私わたくしども子供の内から親どもの話に聞いてお

りましたが、何でも十六七の小僧の時分、神隠しか、攫さらわれたか、行方知れずになつたんですつて。見えなくなつた日を命日にしてゐる位でございましたそうですが、七年ばかり経たちましてから、ふいと内の者に姿を見せたと申しますよ。

それもね、旦那様、まともに帰つて来たのではありません。破は風ふを開けて顔ばかり出しましたとき、厭いやじやありませんか、正しょう丑うしの刻うしだつたと申します、」と婆さんは肩をすぼめ、

「しかも降さりました五月雨さみだれのことで、攫さらわれて参まりましたと同お一いっ夜やだと申ましますが、皺しわ枯がれた声こゑをして、

（家うち中ちゆう無む事じか、）といいつたつそうでございますますよ。見みると、真ま暗くらな破は風ふうの間あいから、ぼやけた鼻はなが覗のぞいていましましようではござい

ませんか。

皆、^{みんな}手も足も縮^{すく}んでしまいましたろう、縛りつけられたようになり

まりましたそうでございますが、まだその親が居^おりました時分、魔道へ入った兎^こでも鼻を嘗^なめたいほど可愛かったと申します。

(^{せがれ}悴、まあ、)と父^{ておや}親が寄ろうとしますと、変な声を出して、

寄らつしやるな、しばらく人間とは交^{まじわ}らぬ、と払い退^のけるよう

にしてそれから一式の恩返しだといって、その時、饅頭^{あん}の餡の製し方を教えて、屋根からまた行方が解らなくなつたと申しますが、それからはその島屋の饅頭といつて街道名代の名物でございませ

。

十一

「在り来りきたの皮は、麩末そまつな麦の香のする田舎饅頭うまなんです、その餡くあいの工合ぐあいがまた格別、何とも申されません旨うまさ加減、それに幾いくか日置くかきましても干からびず、味は変りませんのが評判で、売れま
すこと売れますこと。」

近在は申すまでもなく、府中八王子あたり辺までもお土産折詰になり
ますわ。三鷹みたか村深大寺、桜井、駒こま返かえし、結構お茶うけはこれに
限る、と東京のお客様にも自慢をするようになりましたでしょう。
三年と五年の中うちにはめきめきと身上しんしょうを仕出しまして、家うちは建て
増まします、座敷こしらは拵こしらえ、通とお庭にわの両方いりごみには入込いりごみでお客様が

一杯といふ勢いきおい、とうとう蔵の二戸前とまえも拵こしらえて、初はじめはほんのもう屋台店で渋茶くみだを汲出しておりましたのが俄にわか分限ぶんげん。

七年目に一度顔を見せましてから毎年五月雨のその晩には、きつと一度ずつ破風はふから覗のぞきまして、

（家中無事か。）おお、厭いやだ！」と寂しげに笑つてお幾婆さんは身みぶるい顫ふるをした。

「その中親うちが亡なくなつて代しろがかわりました。三人の兄弟で、仁右衛門と申しますあの鼻は、一番の惣領、二番目があとを取りますはず筈はずの処、これは厭いやじゃと家出をして坊さんになりました。

そこで三蔵と申しまする、末うちが家へ坐まりしましたが、街道一の家繁昌、どういたして早やただの三蔵じゃあございませぬ、寄合に

も上席で、三蔵旦那でございしまする。

誰のお庇かけだ、これも兄者人あにじやひとの御守護のせい何ぞ恩返しを、と

神様あつかい、伏拝みましてね、」

と婆たなそこさんは掌を合せて見せ、

「一年、やっぱりその五月雨の晩に破風から鼻を出した処で、
ある

(何ぞお望のぞみのものを)と申上げますと、(ただ据えておけば可い、
女房を一人、)とそういつたそうでございします。」

「ふむ、」

「まあ、お聞き遊ばせ、こうなんでございしますよ。」

それから何事を差置いても探しますと、ございました。来るものも一生奉公の気なら、島屋でも飼殺しのつもり、それが年寄で

も不具かたわでもございません。

(色の白い、美しいのがいいいい。)

と異なる声で、破風口から食好みを遊ばすので、十八になるのを伴つれて参りました、一番目の嫁様は来た晩うめから呻うめいて、泣煩うめうて貴方、三月日には瘦やせ衰おとろえて死んでしまいました。

その次のも時々悲鳴を上げましたそうですが、二年経たつてやっぱり骨と皮になつて、可哀そうにこれもいけません。

さあ来るものも来るものも、一年たつか二年持つか、五年とこたえたものは居りませんで、九人までなくなつたのでございます。

あるに任して金子かねも出したではございましょうが、よくまあ、

世間は広くツて八人の九人のと目鼻のある、手足のある、胴のあ

る、髪かみの黒い、色の白い女があつたものだと思ひますのでござい
ますよ。十人目に十三年生きていたという評判おんなの婦人おんなが一人、そ
れは私わたくしもあの辺へに参りました時、饅頭まんどうを買いに寄りましてちよつ
と見ましたつけ。

大柄おんなな婦人おんなで、鼻筋はなすねの通つた、佳いい容きり色よう、少すこし凄こいような風

ツつき、乱みだれ髪がみに浅葱あさぎの顛はちまき卷まきをメ《し》めまして病人びやうじんと見え

ましたが、奥おくの炉ろのふちに立膝たちひざをしてだらしなく、こう額がくに長煙ながえん
管くだをついて、骨ほねが抜ぬけたように、がつくり俯うつむ向むいておりましたが

。

「百姓家の納戸の薄暗い中に、毛筋の乱れました頸えりあし脚あしなんぎ、雪のようで、それがあの、客だと見て真まっさお蒼な顔でこつちを向きましたのを、今でも私わたくしは忘れません。可哀そうにそれから二年目にとうとう亡なくになりましたが、これは府中に居た女郎上りを買つて来て置いたのだと申します。

もうその以前から評判が立っておりましたので、山と積まれてからが金子かねで生命いのちまでは売りませんや、誰も島屋の隠居には片づき人てがなかつたので、どういうものでございますか、その癖、そうやって、嫁よめが極きまりまして女房が居ましても、家へ顔を出しますのはやっぱり破風はふから毎年その月のその日の夜中、ちようど入つ

梅ゆの真まん中なかだと申します、入梅から勘定して隠居が来たあとをちようど同おん一なじように指を折ると、大抵梅雨あけだと噂があつたのでございまして。

實際、おかみさんが出来るようになりましてからも参るのたしかは確に年に一度でございましたが、それとも日に三度ずつも来ましたか、そこどこはたしかなことは解りません。

何にいたしましたしても、来るものも娶とるものも亡くなりましたのは、こりや葬とむらい式いが出ましたから事まつたく実なन्द。

さあ、どんづまりのその女郎が殺されましてからは、怪我にもゆき人てがございません、これはまた無いはずでございましょう。

そうすると一年、二年、三年と、段々店が寂れまして、家も蔵

も旧もとのようではなくなりました。一時は買込んだ田地でんじなども売物に出たとかいう評判でございました。

そうこういたします内に、さよう、一昨年でございましたよ、島屋の隠居うちが家へ帰ったということを知りましたのは。それから戦争の祈祷の評判、ひとしきりは女房一件で、饅頭の餡でさえ胸を悪くしたのも、そのお国のために断食をした、お籠こもりをした、千里のさき三年のあとのあとまで見通しだと、人気といっちゃあおかしく聞えますが、また隠居殿の曲った鼻まつすぐが素直まっすぐになりました、新聞にまで出まする騒ぎ。予言者だ、と旦那様、活いき如来よらいの扱あつかいでございましたよ。

ああ、やれやれ、家うちへ帰つてもあの年紀としで毎晩々々機織はたおりの透

見をしたり、糸取場を覗のぞいたり、のそりのそり這はうようにして歩あ行るいちや、五宿の宿場女郎の張はり店みせを両側ね、糸をかかりますよ
うに一軒々々格子戸の中へ鼻を突つ込こんじやあクンクン嗅かいで歩あ行る
くのを御存じないか、と内々私はちつと聞いたことがございます
ので、そう思っておりますが、善くは思いませんばかりでも、
お肚なかのことを嗅かぎつけられて、変な杖でのろわれたら、どんな目
に逢あおうも知れぬと、薄気味の悪い爺じいさんでございます。

それが貴方、以前からお米を貴方。」

と少し言洩りながら、

「跟つけつ廻まわしつしているのをごさいます。」と思切つた風でいっ
たのである。

「何、お米を、あれが、」と判事は口早にいつて、膝を立てた。「いいえ、あの、これと定つたこともございません、ございませんようなもの、ふらふら堀ノ内様の近辺、五宿あたり、夜更よふけでも行きあたりばったりにうろついて、この辺へはめつたに寄りつきませなんだのが、沢井様へお米が参りまして、ここでもまた、容きりよう色が評判になりました時分から、藪やぶからでも垣からでも、ひよいと出ちやああの女の行こくさきを跟ゆけるのでございます。薄ぼんやりどこにかあの爺が立ってるのを見つけましたものが、もしその歩き出しますのを待っておりますれば、きつとお米の姿が道に見えると申したようなわけでございまして。」

十三

「おなじ奉公人どもが、たださえ口の悪い処へ、大事出^{しゅつ}来^{たい}の
ように言い囃^{はや}して、からかい半分、お米さんは神様のお氣に入っ
た、いまに緋^ひの袴^{はかま}をお穿^はきだよ、なんてね。

まさかに氣があるなどは、怪我にも思うのじやございます
まいが、串^{じょうだん}戯^げをいわれるばかりでも、癩^{かつたい}病^{びょう}の呼^い吸^きを吹^ふ懸^かけ
られますように、あの女^こも弱^{じやく}り切^きつておりましたそうです。

つい事の起ります少し前でした、沢井様の裏庭に夕顔
の花が咲いた時分だと申しますから、まだ浴衣を着ておりますほ
どのこと。

急ぎの仕立物がございましたかして、お米が裏庭に向きました部屋で針仕事をしていたのでございます。

まだ明も点あかりけません、晩方、直じきその夕顔の咲いております垣根のわきがあらいい格子。手許てもとが暗くなりましたので、袖が触りますばかりに、格子の処へ寄つて、縫物しておりますと、外は見通しの畠、畦あぜみち道を馬も百姓も、往いつたり、来きたりします処、どこで見当をつけましたものか、あの爺じいのそのそ嗅かぎつけて参りましてね、蚊遣かやりの煙がどことなく立ち渡ります中を、段々近くへ寄つて来て、格子へつかまって例の通り、鼻の下へつつかい棒の杖をついて休みなながら、ぬつとあのふやけた色づいて薄赤い、てらてらす鼻せきの尖を突き出して、お米の横顔の処を嗅かぎ出したので

ございますと。

もうもう五宿の女郎の、油、白粉、襟垢の香まで嗅いで嗅いで嗅ぎためて、ものの匂で重量がついているのでございますもの、夢中だって氣勢が知れます。

それが貴方、明前へ、突立つてるのじゃあございません、

脊伸をしてからが大概人の蹲みます位なんで、高慢な、澄した今産れて来て、娑婆の風に吹かれたという顔色で、黙って、暖をしちやあ、クンクン、クンクン小さな法螺の貝ほどには鳴したのでございます。

麴室の中へ縛られたような何ともいわれぬ厭な気持で、しばらくは我慢をもしましたそうな。

お米が気の弱い臆病ものの癖に、ちよつと癩かんもち持で、気に障ると直きつむりが疼いたみ出すという風なんですから堪たまりませんや。

それでもあの爺おやの、むかしむかしを存じておりますれば、劫こうへ終はわたくし私わたしどもでさえ、向むこうづら面めんへ廻まわしちやあ気味の悪い、人間には籍いのないような爺おや、目を塞ふさいで逃にげますまでも、強きついことなんぞ謂いわれたものではございませんが、そこはあの女こは近頃こちらへ参まりましたなり、破は風口ふうぐちから、Ⅱ無事かⅡの一件なんざ、夢にも知りませず、また沢井様などでも誰もそんなことは存じません。

串じょうだん戯ぎにも、つけまわしている様子を、そんな事でも聞かせましたら、夜が寝られぬほど心持を悪くするだろうと思ひますから、私もうっかりしやべりませんでございませうから、あの女こはた

だ汚い変な乞食、親仁おやし、あてにならぬうらないしやト、者を、愚痴無智の者がけだもの獣を拜む位な信心をしているとばかり承知をいたしておりましたので、

(不可いけませんよ、不可いけませんよ、)といつても、ぬツとしてクンクン。

(お前はうるさいね、)と手にしていた針さきの尖、指環ゆびわに耳つを突つ立てながら、ちよいと鼻はながしら頭はしらを突いたそうでございます、はい。」
 といつて婆あさんは更あまった。

「洋犬かめめかけの妾めかけになるだろうと謂いわれるほど、その緋ひの袴はかまでなぶられるのを汚けがらわしがついていた、処女むすめ気けで、思切しきつたことをしたもので、それで胸むねがすつきりしたといつか私わたくしに話はなしましたつけ。

氣味きみを悪わるがらせまいとは申しませんが、ああこの女こは飛とんだことをおしだ、外のものとは違ちがつてあのけたい親仁おきな。

蝮まむしの首くびを焼や火箸ひばしで突ついたほどの祟たたりはあるだろう、と腹おなかじやあぞつと慄然ぞつといたしまして、爺じいはどうしたと聞ききましたら、

（いいえ、やっぱりむずむずしてどこかへ行いつてしまいました、それツきり、さっぱり見みかけないんですよ。）と手柄て顔かほに、お米こめは胸むねがすいたように申しましたが。

なるほど、その後はしばらくこの辺へは立廻たてまわりません様子ようす。し

ばらく影を見ませんから、それじゃあそれなりになったかしら。帳消しにはなるまいと思ひながら、一日ましに私もちつとは気がかりも薄らぎました。

そういたしますと今度の事、飛んでもない、旦那様、五百円紛失の一件で、前ぜん申しました沢井様へ出入の大八百屋が、あるじ自分でまかり罷出ましてさ、お金子かねの行方を、一番ひとつ、是非、だまされたと思つて仁右衛門にみておもらいなさいまし、とたつて、勧めたのでございますよ。

どうして礼なんぞ遣やつては腹を立てたたりて崇をします、ただ人助けにつかまつ仕りますること、好すきでお籠こもりをして影も形もない者から聞いて来るのでございます、と悪気のない男ですが、とかく世話好の、

何でも四文しもんとのみ込んで差出たがる親仁しんなんで、まめだつて申上げたものですから、仕事はなし、新聞は五種いつしゆも見ていらつしやる沢井の奥様。

内々その予言者だとかいうことを御存じなり、外あたりに当はず、かたがた旁々それでは、と早速じじい爺をお頼み遊ばすことになりました。

府中の白雲山の庵室へ、佐助がお使者に立つたとやら。一日措おいて沢井様へ参りましたそうでございます。そしてこれはお米から聞いた話ではございません、爺をお招きになりましたことなんぞ、私はちつとも存じないでありますと、ちようどそのトうらないを立てた日の晩方でございます。

旦那様、貴下あなたが桔梗ききようの花を嗅かいでる処を御覧じやりましたと

いう、吉きちさんという植木屋の女房かみさんでございます。小体こていな暮しで共稼つかいあるきぎ、使歩行つかいあるきやら草取くさとりやらに雇かわられて参まゐるのが、稼かせぎの帰かえりと見えまして、手て甲こう脚きゃく絆はんで、貴方あなた、鎌かまを提たげましたなり、ちよこちよこと寄よりました、

(お婆おばあさん今日は不思議ふしぎなことがありました。沢井さわい様の草刈くさぎりに頼たのまれて朝疾あさはやくからあちらへ上あつて働はたらいておりますと、五百円ごひゃくえんのありかをうらな卜うらなうのだといつて、仁右衛門にゑもん爺おやさんが、八時頃はつしきに遣やつて来て、お金子かねが紛失まぎしたというお居室いままへ入いつて、それから御祈ごきとう禱とうがはじまるということ、手を休やすめてお庭にわからその一室ひとまの方かたを見ておりました。何をなにしたか分わりませません、障子襖ふすまは閉切ふつてございまましたつけ、ものものの小半時こはんじ経たつたと思おもうと、見ていた私わたしは吃驚びっくりして、

地震だ地震だ、と極きまりの悪い大声を立てましたわ、何の事はない、お居間の瓦屋根が、波を打って揺れましたもの、それがまた目まぐるしく大揺れに揺れて、そのままひっそり静まりましたから、縁側の処へ駆けつけて、ちようど出て参りましたお勢さんという女中に、酷ひどい地震でございましたね、と謂いますとね、かげんな顔をして、へい、と謂ったツきり、気けもないことなんで、奇代で奇代で。」とこう申すんでございましたよ。」

十五

「いかにも私だって地震があつたとは思いません、その朝は、」

と婆さんは振返つて、やや日脚の遠退とわのいた座を立つて、程過ぎ
て秋の暮方の冷たそうな座蒲団を見遣りながら、

「ねえ、旦那様、あすここに坐つておりましたが、風立ちもいたし
ませず、障子に音もございませぬ、穏かな日なんですもの。

（変じやあないか、女房おかみさん、それはまたどうした訳だろう、）

（それが御祈祷をした仁右衛門爺さんの奇特でございます。沢井
様でも誰も地震などと思つた方はないのでして、ただ草を刈つて
おりました私の目にばかりお居間の揺れるのが見えたのでござい
ます。大方神様がお寄んなすつたしるし験しるしなんでございましょうよ。案
の定、お前さん、ちようど祈祷の最中、思い合してみますれば、
瓦が揺れたのを見ましたのとおなじ時、次のお座敷で、そのお勢

というのに手伝つて、床の間の柱に、友染たすきの襷たすきがけて艶つやぶきん雑巾つやぶきんを
 かけていたお米という小間使が、ふつと掛花かけはないけ活の下で手を留め
 て、活けてありました秋草をじつと見ながら、顔を紅べにのようにし
 たということですよ。何か打合せがあつて、密そつと目をつけていた
 ものでもあると見えます。お米はそのまんま、手が震えて、足が
 ふらついて、わなわなして、急に熱でも出たように、部屋へ下つ
 て臥ふせりましたそうな。お昼過すぎからは早や、お邸中寄ると触ると、
 ひそひそ話。

高い声では謂われぬことだが、お金子かねの行先はちやんと分つた。
 しかし手証を見ぬことだから、膝ひざもと下へ呼び出して、長煙草ながぎせるで
 打擲ひつぱたいて、吐ぬかさせる数すうではなし、もともと念晴しだけのこと、

なわつき
繩着は邸内やしきうちから出すまいという奥様の思召し、また爺さん
の方でも、神業かみわざで、当人が分つてからが、表沙汰にはしてもら
いたくないと、約束をしてかかった祈いのりなんだそうだから僥倖しあわせさ。
しかし太りようけんい簡かんだ、あの細い胸どうなか中を、鎖で繋がれる様さまが見
たいと、女中達かおつきがいつておりました。ほんとうに女形かつらが鬢かみをつけ
て出たような顔かおつき色をしていながら、お米と謂うのは大変なもの
じゃあございませんか、悪党でもずっと四天よてんで出る方だね、私ど
もは聞いてさえ五百円！）とその植木屋かみさんの女房しやべが饒舌しやべりました。
饒舌しやべりました。

旦那様もし貴方、何とお聞き遊ばして下さいますえ。」
判事は右手めてのさきで、左の腕かいなを洋服の袖の上からしつかとおさ

えて、きつ屹とお幾の顔を見た。

「どう思召して下さいます、わたくし私は口が利けません、いいわけをするのさえ残念でたま堪りませんから碌ろくに返事もしないでおりますと、あかり灯をつけるとつて、植吉の女かみさん房はあたふた帰つてしまいました。何も悪気のある人ではなし、私とお米との仲を知つてるわけもないのでございますから、驚かして慰むにも当りません、お米は何にも知らないにしましても、いっただけのことはその日ありましたに違いないのでございますもの。

私は寝られはいたしません。

きみようちょうらい帰命頂来！

お米が盗んだとしますれば、私はその五百円が紛失したといえまする日に、耳を揃えて頂かされたのでござい

ます。

どんな顔をされまいものでもないど、口惜くやしさは口惜し、憎らしさは憎らし、もうもう掴つかみついて引ひきむし撈むしつてやりたいような沢井の家の人の顔を見て、お米に逢いたいと申して出ました。」

十六

「それも、行ゆこうか行くまいかと、氣を揉もんで揉抜いた揚句、どうも堪たまらなくなりまして思切しきりつて伺うかがいましたので。

心からでございましょう、誰たれの挨拶あいさつもけんもほろろに聞えましてたけれども、それはもうお米こめに疑うたがいかかかったなんぞとは、曖おくびにも

出しませんで、逢つて帰れ！ と部屋へ通されましてございます。
 それでも生命いのちはあつたか、と世を隔てたものにも逢いますよ
 うな心持。いきなりすが継り寄つて、寝ている夜具の袖へ手をかけま
 すと、密そつと目をあいて私わたくしの顔を見ましたつけ、三日四日が間にめ
 つきりやつれてしまいました、顔を見ますと二人とも声こゑよりは前
 へ涙なみだなन्दでございます。

物もいわないで、あの女こが前髪こわれのこわれた額際ひつまで、天鷲びろうど絨じゆの
 襟えりを引かぶつたきり、ふるえて泣いてるのでございましょう。

ようよう口を利かせますまでには、大概骨が折れた事じゃアあ
 りません。

口説いたり、すかしたり、怨うらんでみたり、叱つたり、いろいろ

にいたして訳を聞きますると、申訳をするまでもない、お金子に
手もつけはしません、駈げんのある祈をされて、居ても立つてもい
られなくなつたことがある。

それは

やっぱりお金子かねの事で、私は飛んだ心得違いをいたしました、
もうどうしましょう。もとよりお金子は数さえ存じません位です
が、心では誠に濟まないことをしましたので、神様、仏様にはど
んな御罰おぼち ころむを蒙るか知れません。

憎らしい鼻しじいの爺じいは、それはそれは空恐ろしいほど、私の心の内
を見抜いていて、日に幾たびとなく枕まくらもと許へ参つては、

(女むすめ) 罪のないことは私わしがよう知つている、じやが、心に濟まぬ

事があるう、私を頼め、助けてやる、と、つけつまわしつ謂うのだそうで。

お米は舌を食い切つても爺の膝を抱くのは、厭いやと冠かぶりをふり廻すと申すこと。それは私も同おんなじ一だけれども、罪のないものが何を恐がつて、煩うということがあるものか。済まないというのは一体どんな事と、すかしても、口説いても、それは問わないで下さいましと、強いていえば震えます、頼むようにすりや泣きますね、調子もかわつて目の色も穩おだやかでないようでした。ごさいました。ごさいません。で、しおしおその日は帰りました、一杯になる胸かきやぶを搔破かきやぶりたいほど、私が案ずるよりあの女この容体は一倍で、とうとう貴方、前後が分らず、厭なことを口走りまして、時々、そ

れ巡査おまわりさんが捕まえる、きやつと行ってはねおつ起きたり、目を見据えましては、うつとりしていて、ああ、真暗まつくらだこと、牢へ入れられたと申しちやあ泣くようになりました。そんな容子ようすで、一日々々、このごろでは目もあてられませんかように弱りまして、ろくろく湯水も通しません。

何か、いろんな恐しいものが寄つて集たかつて苛さいなみますような塩あんば梅い、爺いにさえ縋たしかつて頼めば、またお日様が拜まれようと、自分の口からも氣たしかの確な時は申しながら、それは殺されても厭だといえます。

神でも仏でも、尊い手をお延ばし下すつて、早く引上げてやつて頂かねば、見る中うちにも砂一粒ずつ地の下へ崩れてお米は貴方、

旦那様。

奈落の底までも落ちて参りますような様子なのでございます。

その上意地悪く、鼻めが沢井様へ入り込みますこと、毎日のよう。奥様はその祈の時からすっかり御信心をなすつたそうで、畳の上へも一件の杖をおつかせなさいますお扱い、それでお米の枕許をことごとと叩いちやあ、

（気分はどうじゃ、）といたしますそうな。」

十七

お幾は年とし紀の功だけに、身を震わさな**い**ばかりであったが、

「いえ、もう下らないこと、くどくど申上げまして、よくお聞き遊ばして下さいました。昔ものの口不調法、随分御退屈をなすつたでございましょう。他に相談相手といつてはなし、交番へ届けまして助けて頂きますわけのものではなし、また親類のものでもちかづき知己でも、私が話を聞いてくれそうなものには謂いました処でおもいやり思遣にも何にもなるものじゃあございせん、旦那様が聞いて下さいましたので、私は半分だけ、荷を下しましたように存じます。その御深切だけで、もう沢山なのでございしますが、欲には旦那様何とか御判断下さいますわけには参りませんか。

こんな事を申しましてお聞上げ……どころか、もしお気に障りましては恐入りますけれども、一度旦那様をお見上げ申しまして

からの、お米の心は私がよく存じております。囃言うわごとにも今度の
 その何か済まないことやらも、旦那様に対してお恥かしいことの
 ようでもございますが、はした 忝ない事を。

飛んだことをいう奴だと思し召しますなら、私だけをお叱り下
 さいまして、何にも知りませんお米をおさげすみ下さいますなえ。

それにつけ彼かにつけましても時ならぬこの辺へ、旦那様のお立
 寄遊ばしたのを、私はお引合せと思ひますが、飛んだ因縁だとお
 あきらめ下さいますして、どうぞひとつひとこと 一番一言でも何とか力になりま
 すよう、おっしゃっては下さいますせんか。何しろ煩つております
 ので、片時でもほつという呼吸いきをつかせてやりたく存じますが、
 こうでございませぬ、旦那様お見かけ申して拝みまする。」ことば と言も

切に声も迫つて、両眼に浮べた涙とともに真は面まことおもてにあふれたのである。

行懸ゆきがかり、言の端ことば、察するに頼母たのもしき紳士と思ひ、且つ小山を婆ばばが目からその風采ふうさいを推して、名のある医士であるとしたらしい。

正に大審院に、高き天を頂いて、国家の法を裁すべき判事は、よく堪えてお幾の物語の、一部始終を聞き果てたが、渠かれは實際、事の本末もとすえを、冷ひやかに判ずるよりも、お米が身に関する故をもつて、むしろ情において激せざるを得なかつたから、言下ごんかに打出して事理を決する答をば、与え得ないで、

「都を少しでも放れると、怪けしからん話があるな、婆さん。」と

ばかり吐息といきとともにいったのであるが、言外おのずからその明めい眸まの届うくべき大審院の椅子の周囲、西北さいほく三里以内にに、かかる不平を差置さくに忍しのびざる意気があつて露あらわれた。

「どうぞまあ、何は措おきましてともかくもう一服遊ばして下さいまし、お茶も冷えてしまいました。決してあの、唯今のことにつきましておねだり申ましますのではございません、これからは茶店を預まります商売冥み利り、精一杯の御馳走ごちそう、きざ柿むでも剥むいて差上げましょう。生の栗がございしますが、お米が達者たつ者ぶでいて今日も遊あびに参まりましたら、灰うに埋うんで、あの器用な手で綺麗きれいにこしらえさして上げましょうものを。……どうぞ、唯今お熱いお湯を。且ま那樣お寒ひやくなりはしませんか。」

今は物思いに沈んで、一^{いっ}秒^セの間に、婆が長物語りを三たび四たび、つむじ風のごとく疾^とく、颯^{さつ}と繰返して、うつかりしていた判事は、心着けられて、フト身に沁^とむ外^{かた}の方を、欄干^{ごし}越に打^{うち}見遣^{みや}つた。

黄^{たそがれ}昏^れや、早や黄昏は森の中からその色を浴びせかけて、滝を蔽^{おお}える下道を、黒^{あやめ}白^めに紛^まるる女の姿、縁^{えに}の糸に引寄せられけむ、裾^{たもと}も袂^{とびん}も鬢^{びん}の毛も、夕^{ゆう}の風^べに漂^よう風情。

十八

「おお、あれは。」

「お米でございますよ、あれ、旦那様、お米さん、」と判事にいうやら、女むすめを呼ぶやら。お幾は段を踏ふみすべこらすようにしてずりりと下りて店さきへ駆け出すと、欄干てすりの下を駆け抜けて壁について今、婆さんの前へ衝つと来たお米、素足のままで、細帯ほそおびばかり、空色の袷あわせに襟えりのかかった寝衣ねまきの形で、寢床ぬけだを脱出した窶やつれた姿、追かけられて逃げる風で、あわただしく越そうとする敷居つまさに爪つまさ先きを取られて、うつむけさまに倒れかかって、横に流れて蹠よろめ踵かかとく処ところを、

「あッ、」といつて、手を取った。婆さんは背せなを支えて、どツさり尻しりについて膝ひざを折りざまに、お米を内へ抱え込こむと、ばったり諸共もろともに畳たたみの上うへ。

この煽^{あお}りに、婆^{おば}さんが座右の火鉢の火の、先刻^{さつき}からじように成
果^{まつしろ}てたのが、真^ま白^{しろ}にぱつと散^{むすめ}つて、女の黒髪にも婆さんの袖に
もちらちらと懸^{かか}つたが、直ぐに色も分かず日は暮れたのである。

「お米さん、まあ、」と抱いたまま、はッはッというと、絶^{ぜつ}ゆげな
呼^{いき}吸^{いき}づかい、疲果^{もた}てた身を悶^{もた}えて、

「厭^{いや}よう、つかまえられるよう。」

「誰に、誰につかまえられるんだよ。」

「厭^{おまわり}ですよ、あれ、巡^{おまわり}査^ささん。」

「何、巡査さんが、」と驚いたが、抱く手の濡れるほど哀れ冷汗
びっしよりで、身を揉^もんで逃げようとするので、さては私だとい
う見境ももうなくなつたと、気がついて悲しくなつた。

「しつかりしておくれ、お米さん、しつかりしておくれよ、ねえ。」

お米はただ切なそうに、あああというばかりであつたが、急にまた堪え得ぬばかり、

「堪忍よう、あれ、」と叫んだ。

「堪忍をするから謝罪れの。どこをどう狂い廻つても、私が目から隠れる穴はないぞの。無くなつた金子は今日出たが、汝が罪は消えぬのじゃ。女、さあ、私を頼め、足を頂け、こりやこの杖に縫れ。」と蚊の呻くようなる声して、ぶつぶついうその音調は、一たび口を出でて、唇を垂れ蔽える鼻に入つてやがて他の耳に来るならずや。異様な持主は、その鼻を真俯向けに、長やかなる

顔を薄暗がりの中に据え、一道の臭気を放って、いつか土間に立つてかの杖で土をことごとと鳴ならしていた。

「あれ。」打てば響くがごとくお米が身内はわなないた。

堪たまりかねて婆さんは、鼻に向つて屹きつと居直つたが、爺じじいがクンクンと鳴して左右に蠢うごめかしたのを一目見ると、しりごみをして固くお米を抱きながら竦すくんだ。

「杖に縋むすつて早や助かれ。女むすめやい、女、金子は盗まいでも、自分の心こゝろが汝うぬが身を責殺すのじゃわ、たわけ奴めが、フン。我わしを頼め、膝を抱け、杖に縋れ、これ、生命いのちが無いぞの。」と洞穴の奥から幽かすかに、呼ぶよう、人間の耳に聞えて、この淫魔いんまほざきながら、しただかの狼藉ろうぜきかな。杖を逆に取つて、うつぶしになつて上あがりぐ

口ちに倒れている、お米の衣きぬの裾をハタと打って、また打った。

「厭よ、厭よ、厭よう。」と今はと見ゆる悲鳴である。

「この、たわけ奴めの。」

段の上ですツくと立って、名家の彫像のごとく、目まじろきもしないで、一場じょうの光景を見詰めていた黒くろき衣きぬ、白おもとき面せいく、清癯せいよく鶴つるに似たる判事は、衝つと下りて、ずツと寄って、お米の枕まくらもと頭に座を占めた。

威厳犯すべからざるものある小山の姿を、しよぼけた目でじつと見ると、予言者の鼻は居所をかえて一足退すざった、鼻と共に進退して、その杖の引込ひっこんだことはいうまでもなからう。

目もくれず判事は静しずかにお米の肩に手を載のせた。

軽くおさえて、しばらくして、

「謂うことが分るか、姉さん、分るかい、お前さんはね、紛失したというその五百円を盗みも、見もしないが、欲しいと思つたんだらうね。可し、欲しいと思つた。それは深切なこの婆さんが、金子を頂かされたのを見て、あの金子が自分のものなら、老人のものにしたいと、……そうだ。そこを見込まれたのだ。何、妙なものに出会して気を痛めたに違いなからう。むむ、思つたばかり罪はないよ、たとい、不思議なものとがめの咎があつても、私が申請けよう。さあ、しつかりとつかまれ。私が楯たてになつて怪いものあやしの目から隠してやろう。ずっと寄れ、さあこの身体からだにつかまつてその動悸どうきを鎮めるが可い。放すな。」と爽さわやかにいった言ことばにつれ、

声につれ、お米は震いつくばかり、人目に消えよと取絶った。

「婆さん、^{あかり}明を。」

飛上るようにして、やがてお幾が捧げ出した灯の影に、と見れば、予言者はくるりと背後^{うしろ}向になつて、耳を傾けて、真^{しんちゆう}鍬の耳搔を悠々とつかいながら、判事の言を聞澄^{ことば}しているかのごとくであつた。

「安心しな、姉さん、心に罪があつても大事はない。私が許す、小山由之助だ、大審院の判事が許して、その証拠に、盗^{ぬすみ}をしたいと思つたお前と一所になろう。婆さん、媒^{なこうど}灼人は頼んだよ。」

迷信の深い小山夫人は、その後永く鳥獣の肉と茶^{ちやだち}断をして、判事の無事を祈っている。蓋^{けだ}し当時、夫婦を呪^{じゆそ}詛するといふ捨^{すてぜ}

台辞りふを残して、我言わがかくのごとく違たがわじと、杖をもつて土を打つこと三たびにして、薄月うすづきの十日の宵の、十二社の池の周囲を弓なりに、飛ぶかとはかり走り去つた、予言者の鼻の行方がいまだに分らないからのことである。

明治三十四（一九〇一）年一月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成2」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年4月24日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第六卷」岩波書店

1941（昭和16）年11月10日発行

入力：門田裕志

校正：土屋隆

2007年2月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

政談十二社

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>